

日本における異文化コミュニケーション研究の射程に関する一考察 —記号論的転回による原点回帰—

An Exploratory Study of the Scope of Intercultural Communication Studies:
A Return to the Point of Origin with a Semiotic Turn

石黒武人

Taketo ISHIGURO

キーワード

異文化コミュニケーション研究、自然、超自然、記号論的転回
intercultural communication studies, nature, the supernatural, semiotic turn

Abstract: The purpose of this paper is two-fold. The first purpose is to show that “nature” and “the supernatural” were once positioned as relevant and important themes in intercultural communication studies (ICS) by reviewing relevant literature of the 1960s and 1970s. The second purpose is to demonstrate that in the first decade of the 2000s, “nature” and “the supernatural” were once again incorporated in ICS in Japan, but with a semiotic turn. On first glance, it is difficult to relate “nature” and “the supernatural” to intercultural communication studies, partly because “intercultural communication” in Japan has long been regarded as being equivalent to “English conversation” or “communication in a foreign language”. However, this paper argues that in the early stage of the development of ICS, “nature” and “the supernatural” were seen as catalysts to probe cultural differences and thus intercultural communication, as suggested in such foundational works as Kluckhorn & Strodtbeck’s model (1961) of value orientations and Condon & Yousef (1975)’s discourse on intercultural communication. In Japan, Ishii (2008) and Ikeda & Kramer (2000) presented their discourses of this line of thought. The establishment of the Rikkyo Graduate School of Intercultural Communication in 2002 and its subsequent exploration into a new form of ICS with environmental communication played an important role in creating a semiotic framework of incorporating “nature” and “the supernatural,”

and thus environmental communication, into ICS. This semiotic turn opens up new possibilities for ICS, as it enables the discipline to be more flexible in dealing with not only “nature” and “the supernatural,” but also such new topics as artificial intelligence in the context of ICS, and thus to cope with emerging problems regarding intercultural communication in this ever-changing globalized world.

1. はじめに

1.1 研究の背景

異文化コミュニケーション研究 (intercultural communication studies) の射程は広く、じつにさまざまなテーマが扱われ、研究方法やその背景となる研究パラダイムも多岐にわたっている (cf. Zhu, 2016)。研究テーマとしては、文化、民族、宗教、ジェンダー、言語・非言語コミュニケーション、レトリック、カルチャーショック・リエントリーショック、異文化適応、文化伝播、知覚・認知過程 (ステレオタイプ・偏見・差別など)、アイデンティティ、パワー (権力関係)、異文化コミュニケーション能力、異文化間交渉・紛争・葛藤、異文化間教育・研修・訓練、言語教育・第二言語習得、通訳翻訳、対人・集団 (組織) コミュニケーション、メディア、多文化共生、国際協力・援助、環境教育などがある (cf. 守崎, 2001; 石井・久米, 2013; Martin & Nakayama, 2007)。そうしたテーマが実証主義、解釈主義、批判理論といった立場から多様な切り口で扱われる。しかしながら、日本の異文化コミュニケーション研究の動向を概観すれば、テーマによっては、十分に扱われていないものがあるだけでなく、異文化コミュニケーション研究という範疇のなかで扱うべきものか否か、といふかしむ向きもある。

前者の例として「宗教 (あるいは超自然)」があり (e.g., 石井, 2013)、後者の例として「自然環境」がある。「宗教」は異文化コミュニケーションにおける現象、自己、他者の理解を進めるうえで重要な一要素でありながら、神や霊といった科学的言説では扱いが難しい内容を含んでおり、研究対象にすること自体が避けられてきた傾向がある²。また、その背景には日本社会全体が醸し出している制度化された宗教への関心の低さも影響している可能性がある (cf. 萬代・海山・柴田・清野, 2019)。

一方で後者の「自然環境」については、「自然環境」と「異文化コミュニケーション」とは全く別のものであり、理論的にもそれらを併せて扱うことは難しい、という立場があるだろう。たしかに、一般的にも、自然環境と異文化コミュニケーションとのつながりを直観する人びとは多くないだろう。とりわけ、日本社会においては「異文化コミュニケーション」を「英会話」とほぼ同列で語る時代が 1980 年代から永らく続いてきた経緯があり (cf. 鳥飼, 2011)、現代でも「異文化コミュニケーション」という表現が用いられる場合、それは「異文化コミュニケーション=外国語でコミュニケーションをすること」という単純化されたイメージに基づくものであることが多い。このような背景をふまえれば、「英会話」である異文化コミュニケーションは、自然環境とは接合しづらく、接合できたとしても、英語で自然環境について学び、対話しつつ、対話の参

与者がお互いの文化を学ぶ、といった取り組みにとどまる可能性がある。

しかしながら、本論では、アメリカ国務省が1946年に設置した外国勤務研究所 (Foreign Service Institute, 略してFSI) に集まった研究者たちを中心に、第二次世界大戦後から1950年代にかけて徐々に形成されてきた異文化コミュニケーション研究 (cf. 守崎, 2000) は、じつは、その発展の過程において1960年代および1970年代に自然・超自然を異文化コミュニケーションにおける人間と文化の理解において重要な要素として扱っていた系譜があった事実を指摘し、さらに、その系譜が、2000年代の日本において自然、超自然を包摂する異文化コミュニケーション研究の枠組みとして記号論的視座から再び示されたことを論じる。

1.2 研究の目的

以上をふまえ、本稿では、自然、超自然を射程に含む「異文化コミュニケーション研究」のあり方が、1) その系譜に沿ったものであり、いわば、原点に回帰するものであること、さらに、2) 2000年代の日本の異文化コミュニケーション研究において、記号論的視座から自然、超自然を射程に収める枠組みが提示され、発展的な形で原点に回帰した、という2つの点を論証したい。そのうえで、その枠組みが示唆する異文化コミュニケーション研究のあり方について考察する。

1.3 本論の構成

本論は以下の内容で構成する。まず、自然、超自然が日本の異文化コミュニケーション研究で論点となるうえで、その牽引者となった故・石井敏の議論を紹介しつつ、その源泉となり、異文化コミュニケーションの「研究の始動段階 (1960年代)」(石井・久米, 2013, p. 237) と「研究の体系化段階 (1970年代)」(同上, 2013, p. 239) で提示された関連する代表的な知見 (Kluckhorn & Strodtbeck, 1961) と教科書 (Condon & Yousef, 1971) について述べ、始動段階やその後の体系化段階において自然、超自然が異文化理解とそれに基づく異文化コミュニケーションの重要な要素として組み込まれていたことを論じる。

さらに、2000年代に入り、日本の異文化コミュニケーション研究の言説空間において、「自然環境」が重要な要素として再び取り上げられるうえで、重要な2つの出来事について述べる。まず、Gebser (1949/1986) の空間にかかわる知見とそれを異文化理解に応用した池田・クレマーの著作 (2000) の出版がある。この著作で紹介された空間の三分類は、冒頭で述べた「自然環境」「宗教/超自然」という2つの要素にかかわるものである。つぎに、ほぼ同時期に実現した立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の設置 (2002) とその後、当該研究科において探究された「自然環境」を包摂する異文化コミュニケーション学の枠組み (鳥飼・野田・平賀・小山 (編), 2011) に言及する。

以上の論点をふまえ、日本の異文化コミュニケーション研究において、記号論的視座を援用しつつ、「自然環境」が異文化コミュニケーションにかかわる重要なテーマとして再導入され、研究始動段階・体系化段階とは異なる発展的な形で原点回帰したことを論じる。最後に、発展的な原点回帰から考えられる異文化コミュニケーション研究のあり方について考察する。本稿は、異文化コミュニケーション研究の歴史を自然、超自然に焦点を当てつつ振り返り、当該研究領域の射程について考察するものである。

2. 異文化コミュニケーション研究における「自然」「超自然」の位置づけ

異文化コミュニケーションの「研究の理論化段階」(石井・久米, 2013, p. 240)である1980年代から1990年代にかけて、国際化・グローバル化を背景に、日本においても大学にて異文化コミュニケーションの授業が配置されるなどして異文化コミュニケーションが徐々に普及した。本節では、その普及を牽引してきたといえる石井敏の言説について述べ、その源泉となった1960年代と70年代の異文化コミュニケーション研究の系譜について論じる。

石井は「遠慮と察しのコミュニケーション」(Enryo-sasshi communication: A key to understanding Japanese interpersonal relations) (Ishi, 1984)論文に代表される異文化コミュニケーションに関する数多くの論考や一般に広く普及した教科書・事典で知られる (cf. 『異文化コミュニケーション』(1987)、『異文化コミュニケーション・キーワード』(1990)、『異文化コミュニケーション(改訂版)』(1996)、『異文化コミュニケーション・ハンドブック』(1997)、『異文化コミュニケーションの理論』(2001)、『異文化コミュニケーション研究法』(2005)、『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』(2013)、『異文化コミュニケーション事典』(2013)など)。

石井の議論におけるひとつの力点は、異文化コミュニケーションに関する西洋からの学知の移入にとどまらず、東洋の知見・宗教(主に仏教)を異文化コミュニケーション研究に組み入れた理論の構築を推進し、それを世界に向けて発信することであった(石井, 2005)。上述した「遠慮と察しのコミュニケーション」論文の提示はその一環といえよう。もうひとつの力点は、人間、自然、超自然を視野に入れた異文化コミュニケーション研究の推進であり、関連する論考を残した(石井, 2008; 石井, 2011)。

後者の議論をするなかで、石井(2011)は、自然環境を以下のように位置づけている：

最近の環境コミュニケーション研究・教育で重要な課題となっている生活環境は、文化に影響を与えると同時に、文化の影響を受ける自然環境、人工物環境、そして社会環境の三局面で構成される。(p. 91)

上述のように、生活環境の1つとして自然環境を位置づけ、それは「気象、地勢、海洋、河川などによって代表される」(p. 92)と明確化する。そのうえで、その自然環境と人びとのかかわりが世界規模の自然環境破壊と全地球的な気象変動を引き起こし、生活環境全体が脅かされると述べ、環境破壊や気象変動の要因となっている人間中心主義と市場経済至上主義のイデオロギーとそれに基づく生活スタイルを批判している(石井, 2011)。

自然と人間の異文化コミュニケーションについても、環境コミュニケーション³との関連で、2つの観点から考えるべきであると主張する。第1の観点は、人間と動物・植物の直接的異文化コミュニケーション活動であり、第2の観点は、環境コミュニケーションと関連し、自然観⁴、つまり、人間と自然の関係性にかかわる思想である。とくに、後者は、自然に対する人間中心・優越主義思想に基づいた政治・経済のイデオロギーが色濃く反映された環境保全運動にとどまることなく、人間は自然の一部であり、「自然破壊は人間破壊を意味する」(石井, 2011, p. 96)という仏教の根本思想である縁起につながる視点の重要性に言及している。

また、石井(2011)は、人間と「超自然」の異文化コミュニケーションについて以下のように述べている：

長年潜在的に存在する深層的な宗教対立にもとづく民族紛争やテロ事件が世界各地で多発している現在、人間と超自然（天、神、仏、精霊・霊魂など）の関係に関する世界観・宇宙観と宗教的コミュニケーションの研究・教育を進めることは、異文化コミュニケーション分野の関係者にとってきわめて重要な緊急課題である。（p. 97）

宗教的な見解の違いによる争いは、米ソ（西側東側）のイデオロギー対立の図式が終焉（後景化）した現在、より顕在化しているといえる。また、日常生活レベルで浸透している祈り、呪文、ごんげ、予言、占い、風水なども人間と超自然との異文化コミュニケーション活動（cf. 石井, 2011）であるといえよう。こうした活動に見られる文化差も異文化コミュニケーションの課題となっている。近年、日本の企業組織でも、祈りの場を設けるなどイスラム系の社員に配慮した異文化コミュニケーションが行われている。

上述してきたように、石井の言説は、自然環境および超自然を射程に収める異文化コミュニケーション研究となっている。その源泉は、異文化コミュニケーション研究の体系化段階で提示されたコンドン（Condon）& ユーセフ（Yousef）（1975）による *An Introduction to Intercultural Communication* の第5章（“From values to beliefs: Human nature, nature, the supernatural”）に求めることができる。その内容は、「ヒューマン」（human）だけでなく、「ノンヒューマン」（non-human）をその射程に収めたコミュニケーションを考えるシステム論的な発想に依拠したもので、副題には、nature（自然）、the supernatural（超自然）と記されている。これらは石井（2008）がいう自然、超自然と合致する。

さらに、その源泉を研究の始動段階（1960年代）にまで遡ると、Condon & Yousef（1975）が依拠した文化人類学からの貢献であるクラックホーン（Kluckhohn）とストロドベック（Strodtbeck）による価値志向の研究（1961）がある。そこでは、人間と自然の関係性について、1）「人間が自然に服従」、2）「人間が自然と共存」、3）「人間が自然を征服」という3つの立場が示され、3）の立場が優勢な現代社会においては、石井（2011）が指摘した人間中心を前提とした政治・経済イデオロギーをベースに、乱開発が行われるなど、自然環境の破壊につながりやすい。ローカル、グローバルな社会の双方で異文化コミュニケーションを考える場合には、こうした自然に対する立場の違いやそれに起因する摩擦・対立も視野に入れる必要がある。

以上のように、異文化コミュニケーション研究において、自然、超自然という要素がその始動段階、体系化段階において提示され、その系譜を日本の異文化コミュニケーション研究の言説空間においては石井が中心となって継承してきたといえるだろう。それに加え、日本における異文化コミュニケーション研究の言説空間では、池田理知子（2000）が、教科書『多文化社会と異文化コミュニケーション』（2002）などを媒体として、比較文明学者である Gebser（1949/1986）のマジックな空間、神話的空間、記号的空間という空間の三分類を紹介し、人間と自然のかかわりについて知見を提供したことも大きい。マジックな空間、神話的空間はそれぞれ精霊や聖地といったものを含めた空間のとらえ方を示している。神話的空間については、日本における社や聖地とされる山々や泉が想起できる。現在では、「パワースポット」という呼称でこうした神話的空間の見方がメディアや日常の相互行為のなかで言及され、前景化される。一方、記号的空間は、近代化され、脱魔術化された（自然を含めた）空間を指し示している。記号的空間は、空間を経済的、法律的視点からみることを重視するため、過去において「神が宿る山々」とみなされていた空間も経済開発の対象となりやすくなる。「宇宙」といった空間のとらえ方も、神と関連づけられた神秘的なものから科学的なものへと変化する。

このGebserの知見も「自然」「超自然」を視野にいたれた異文化コミュニケーションの研究を構想するうえで有用な枠組みで、日本における異文化コミュニケーション研究が「自然」「超自然」を包摂する射程を得るうえで重要な貢献であるといえよう。石井(2008)の議論(自然、超自然)とは異なり、始動・体系化段階の異文化コミュニケーション研究のなかで扱われた言説を源泉とはしていないものの、その内容をみれば異文化コミュニケーション研究において自然、超自然を扱う系譜に入るものと考えられる⁵。

自然、超自然については、人類学や社会学で収集されたオーラル・ヒストリーでもしばしば登場し、調査協力者の生活世界を理解する重要な契機となっている。中野(1977)による『口述の生活史』では、ある語り手が、子どもの時期に、お稲荷さんのキツネが10円札を授けてくれた体験が示され、お稲荷さんという超自然的存在が実体視され、語り手の生活世界のいくつかの局面で語られる様子が例示されている。異文化コミュニケーション研究者にとっても、こうした超自然に関する口述が特定文化の生活世界へアクセスする重要な糸口となりうる。そうしたオーラリティ(口述)に反映される文化的多様性を浮かび上がらせ、人びとが生活世界において経験している多元的リアリティを例証できる。自然、超自然を中心的に扱う異文化コミュニケーション研究は未だ少ないとはいえ、上記のような他の学問分野での自然、超自然の扱いを鑑みつつ、自然環境、超自然というテーマを研究の範疇に含めた「異文化コミュニケーション研究」の射程とその可能性を考えることができよう。

ただし、1960年代の始動段階、1970年代の体系化段階における「人間」「自然」「超自然」そして「文化」といった概念は、その時代背景や学問的潮流を反映して、静態的で実体論的な立場からとらえられたものであった。そこで、次節では、より動的で構築主義的な視点に立脚し、自然、超自然をその範疇に収めることができる異文化コミュニケーション研究について論じたい。

3. 記号論的転回による文化本質主義的言説の批判的・発展的継承

ポストモダン思想などの発展により、文化を輪郭がはっきりした形でとらえ、静態的・実体論的にとらえる傾向にある研究プロジェクトは、その内容によっては、個別性を隠蔽し、ステレオタイプ的な文化、人間の理解につながる文化本質主義であるという批判にさらされてきた⁶。たとえば、「日本文化では、人間は自然と共存する」といった言説である。

こうした言説に対する批判は妥当なものが多々あり、それらの批判をふまえたうえで、本質主義的な研究が提示した卓越した視点、たとえば、1)自然をひとつの「他者」とし、コミュニケーションにかかわるアクターとして(尊重し)とらえる視点、また、2)多くの国・文化の生活世界において重要な一部である「超自然」(例:マクロなレベルで語られる「宗教」、ローカルなレベルで語られる「地元の神様」、クリスマスやお正月もある日本のように言語化しづらい宗教的精神の有り様など)を研究の範疇に含める視点がある。さらに、特定の文化で共有されるイーミック(emic)な意識・行動を説明するモデル(例:遠慮と察しのコミュニケーション)などを「文化本質主義」として単に批判し、捨象するのではなく、時代の要請のなかで有用であると考えられる要素を発展的に継承し、異文化コミュニケーションの記述や理解・説明に役立つ知見を生み出す建設的な試みが期待される⁷。

こうした過去の文化本質主義的知見を発展的に継承するための研究の枠組みを考えるうえで重要な出来事が2002年の立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の設立であろう⁸。同研究科で探究された学知を一部紹介した『異文化コミュニケーション学への招待』(みすず書房)、

とりわけ、小山 (2011) による第 1 章「異文化コミュニケーション学と環境学の現在」で示された内容、すなわち、環境学、ネイチャーライティング、環境教育といった領域と異文化コミュニケーション研究との接合を意図するなかで、「自然」「環境」が記号論的視座から (文化本質主義的な視角とは異なる形で) とらえ直され、自然、環境は、コミュニケーションを介して社会文化的に生成、維持、変化させられる動態的なもの、こととしてとらえられることを示した内容が文化本質主義を乗り越える鍵となった。つまり、「自然」「環境」を異文化コミュニケーション研究に包摂するため、「記号論的転回 (semiotic turn)」、もしくは「コミュニケーション論的転回 (communicative turn)」がなされたのである。この枠組みでは、人間を脱中心化する形で、コミュニケーション (出来事) を現象理解の中心に据え、そのなかで生成される「人間」「文化」「自然」、「超自然」、「イデオロギー」といった多種多様なもの、ことを研究の射程に収める「異文化コミュニケーション研究」が理論的に構想されている。

こうした枠組みに基づく研究事例は、異文化コミュニケーション研究という広大な領域のなかで個々の研究者がさまざまな場ですでに当然取り組んでいたと考えられる。しかし、大学院の研究科という研究機関 (とその構成員たち) が、上記のような理論的枠組みをひとつの可能性として提示したことが重要である。自然、超自然だけでなく、言語・非言語コミュニケーション、言語教育、通訳・翻訳、組織、多文化共生、グローバルビジネス、国際援助といった異文化コミュニケーションがかかわるさまざまなジャンルを理論的枠組みに収め、それらがどのように生成されるのかを分析・説明するうえで、この記号論・コミュニケーション論的転回は重要な出来事であった。つまり、1960 年代 (クラックホーン&ストロドベックからの系譜) から積み上げられてきていた「自然環境」を含めた「異文化コミュニケーション研究」の自然主義的、静態的・存在的な「自然環境」観は相対化され、生成的・動態的・存在論的な「自然環境」観を前提とする理論的枠組みへと記号論を経由して変貌した。したがって、日本における制度的かつ理論的な出来事 (研究科の設置および記号論的転回) で、異文化コミュニケーション研究の始動・体系化段階の理論的枠組みとその射程が発展的に継承されたといえよう。

4. 記号論的枠組みから考えられる異文化コミュニケーション研究の営為と射程

1990 年代後半から現在までの異文化コミュニケーション「研究の多様化段階」(石井・久米, 2013, p. 241) の特徴として、方法論の多元主義がある (石井・久米, 2013)。この世界的な研究動向をふまえて今後の研究のあり方について考えれば、上記のような記号論的な視座の導入により、異文化コミュニケーション研究という範疇のなかで実践されている社会科学的アプローチ、解釈的アプローチ、批判的アプローチといったパラダイム (Martin & Nakayama, 2007) に基づいて行われる諸研究が、それぞれ、ある特定の目的、存在論、認識論、価値論、方法論に基づいて企図された記号論的様態であると相対化してみなすことができ、その研究営為の様態自体を科学社会学のようなまなざしをもって批判的に検討できる。そのため、他のパラダイムに基づく概念・理論・方法論を援用する場合に、より自覚的に諸知見を扱うことができ、paradigmatic confusion に陥らないような研究営為を実現する可能性が高まる。

ただし、研究者自身を超越的な立場に置くのではなく、記号論的な過程のなかで一定の意図をもって、さまざまな影響を受けながら、限界・制約のなかで研究に携わる者であるというメタレベルから自身の研究営為をとらえる自覚的なまなざしがそこには生まれる (cf. 浅井, 2009, p. 141)。これも記号論的視点の導入の利点である。灘光 (2006) は、研究者自身が研究過程に影響

を与えている点について以下のように述べる。

研究者をデータと別個の存在としてみなすのではなく、語り手とともに意味を構築していく共同作業者として位置づけ、解釈する際にもその要素を考慮する姿勢が求められよう。例えば、在日朝鮮人が感じる日本人の差別意識をテーマにしたインタビューを日本人が行う時と、同じ在日朝鮮人が行う時とでは、その語りが同じかどうか考えてみるとよい。日本人のインタビュアーには話せない経験を、同胞に対しては、仲間内で通用する表現や語彙を使って語ることもあるだろう。あるいは、日本人だからこそ、訴えたい、伝えたいという話が違った文脈で聞けるかもしれない。調査者と語り手の関係を無視しては、解釈そのものに歪みを生じかねない。(p. 139)

記号論的に考えれば、調査者自身も調査協力者の視点から意味が生み出される「記号」であり、その意味は背景にあるさまざまな文脈のなかで位置づけられるわけである。

また、研究の体系を、ある対象(例：異文化コミュニケーション)を研究するうえで有意義な要素と関係が作っているシステムであると仮定すれば、その体系には、より厳密なものよりゆるやかなものがあると考えられる。異文化コミュニケーション研究は明らかに後者である。ゆるやかな枠組みのなかで、課題や研究目的に応じて、当該研究領域の先行知見に加え、さまざまな学知を取り入れる領域横断的・学際的な研究を構想・実践するのが異文化コミュニケーション研究の特徴のひとつである(久米, 2013)。加えて、今後もグローバル化が進む社会において、さまざまな異文化コミュニケーション関連の新しい課題(例：新型コロナウイルスのような感染症を契機とした人びとの分断)が出てくる可能性が高いことを考えれば、さまざまな学知を援用し、そうした学知を異文化コミュニケーション研究との関係で位置づけ、対象となっている課題の記述や解明を可能にする枠組みを柔軟に構想していく、というあり方は論理的な妥当性がある。その際、課題に対応できる新しい研究枠組みが、研究の読み手に対してブラックボックス化しないように、研究の枠組みをさまざまな領域の読み手に対してできるだけ開かれた形で明示するような記述をしていくことも重要であると考えられる。

5. 結語

一見、その関係性がわかりづらい「自然、超自然」と「異文化コミュニケーション研究」であるが、異文化コミュニケーション研究の歴史を振り返ると、じつは1960年代、70年代の異文化コミュニケーション研究に自然、超自然を重要なテーマとして扱っていた系譜の端緒を見てとることができた。

さらに、その系譜に沿う形で、2000年代の日本において、「自然環境」を範疇に入れた異文化コミュニケーション研究の枠組みが、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の設置とその後の学知の探究によって発展的に展開したことを論じた。つまり、「自然環境」を含め、さまざまなテーマを記号論的視座から理論的に包摂できる「異文化コミュニケーション研究」という領域のひとつのあり方が示された。Artificial intelligenceに基づくデジタル化された空間などを含めた「環境」、そして「社会」「文化」「言語」「心理」「医療」「教育」「通訳」「翻訳」「ビジネス」などの現実や意味がコミュニケーション(言語・非言語記号)を介して生成されているという記号論的事実をふまえれば、異文化コミュニケーション研究という学域の射程もまた生成(解釈)

されるものであり、本稿の議論も異文化コミュニケーション研究のあり方に関するひとつの記号論的営みの産物であるといえよう。

註

- 1 灘光洋子先生には、筆者が立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科在籍時に、博士論文の副査をご担当いただき、的確なご指導・ご助言をいただきました。とりわけ、灘光先生の論文「社会構築主義が異文化コミュニケーション研究に与える影響についての一考察」(『成蹊英語英文学研究』10, 133-147, 2006)からは多くの示唆を受け、博士論文の方法論を書くうえで大いに助けとなりました。本稿は、社会構築主義と重なる、記号論的転回が異文化コミュニケーション研究の枠組みにどのような影響を与えたかという点について自然・超自然という切り口で論じ、上記の灘光先生による論文へのオマージュともいえます。この場をお借りし、これまでの灘光先生の異文化コミュニケーション研究・教育への多大なるご貢献ならびに個人的に受けたご指導・ご助言に心から敬意と感謝の念を述べさせていただきます。また、先生のモノゴトの本質を鋭くつかみとり、巧みかつ明瞭に言語化されるお姿は、筆者にとって導きの糸となっています。誠にありがとうございました。
- 2 「異文化コミュニケーション」(intercultural communication)ということばを初めて用いたといわれているE. T. Hall (1959)が文化人類学者であることから推察されるように、異文化コミュニケーション研究に対する文化人類学による貢献は大きく、さまざまな文化における神、霊、自然についての見方に関する知見を多く提供している。本稿で扱うKluckhorn & Strodtbeck (1961)の価値志向の研究は、異文化コミュニケーション研究という文脈のなかで、文化間における自然に対する見方の違いが1つの焦点となることを示唆している。ただし、異文化コミュニケーション研究では、1970年代から80年代に体系化と理論の提示と検証を中心に社会科学化が進み、その過程で人文科学よりの文化人類学的知見がいったん後景化されたと考えられる。
- 3 研究分野としての「環境コミュニケーション」は、アメリカにおいて「環境問題に関与するコミュニケーション学」として注目された(野田, 2013a)。環境コミュニケーション論には、1) 自然環境に関する(about)コミュニケーション様態の問題、2) 自然環境との(with)コミュニケーション様態の問題という2つの側面がある(同上)。
- 4 野田(2013b)によれば、自然観とは、「人々の自然に対する見方」(p. 407)である。野田は、誰もがそれぞれの自然観をもっており、それが文化や歴史に条件づけられ、規定されている点を指摘している。
- 5 この流れの端緒となっているのは、*Silent Language*でE. T. Hall (1959)が提示したproxemics (近接空間論)であろう。もちろん、ゲブザーとHallに直接的な相互言及があるということではなく、Hallが異文化コミュニケーションという範疇のなかで空間感覚を重要なものとして位置づけたことが、異文化コミュニケーションにおいて池田氏がゲブザーを導入する言説空間を担保していたといえよう。
- 6 ミルトン・ベネット(Bennett, 2013)がその著書で指摘するように、文化そのものではなく、文化に所属する人びとの傾向を理解するためのconstructionとしての「文化」という考え方も示されており、個別性をふまえたうえで、ある集団に属する人びとの傾向を示す「文化的一般化」が有効な知見となりえるという議論もある。
- 7 試みのひとつとして、石黒(2006)では、石井の「察し」概念(構造主義、本質主義的なもの)にロラン・バルトの「作者の死」という概念(ポスト構造主義的なもの)を接合して、「多元的察し」という概念を提示した。
- 8 科研費の区分に「異文化コミュニケーション(学)」という独立したカテゴリーがなく、外国語教育の下位カテゴリーとして存在している現状では、後に博士課程まで設置される大学院の設立は異文化コミュニケーション研究にとって重要な前進であったといえる。

参考文献

- 浅井優一 (2009). 「異文化コミュニケーション学, あるいは、文化と自然のポエティックス——『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』についての一考察——」『異文化コミュニケーション論集』7, 135-145.
- Bennett, M. (2013). *Basic concepts of intercultural communication: Paradigms, principles, and practices*. Boston, MA: Intercultural Press.
- Chen, G. M. (2005). *Foundations of intercultural communication*. Lanham, MD: University Press of America.
- Condon, J. C., & Yousef, F. (1975). *An introduction to intercultural communication*. New York, NY: Macmillan Publishing Company.
- 古田暁 (監修)・石井敏・岡部朗一・久米昭元 (1987). 『異文化コミュニケーション』有斐閣.
- 古田暁 (監修)・石井敏・岡部朗一・久米昭元 (1996). 『異文化コミュニケーション [改訂版]』有斐閣.
- Gebser, J. (1949/1986). *The ever present origin* (N. Barstad & A. Mickunas, Trans.). Athens: Ohio University Press.
- Hall, E. T. (1959/1973). *The silent language*. New York: Doubleday Anchor.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. New York: Doubleday Anchor.
- Hall, E. T. (1990). *The hidden dimension*. New York: Doubleday Anchor.
- Hua, Z. (2016). Identifying research paradigms. In Z. Hua (Ed.), *Research methods in intercultural communication: A practical guide* (pp. 3-22). West Sussex, UK: Wiley Blackwell.
- 池田理知子・クレーマー, E. M. (2000). 『異文化コミュニケーション・入門』有斐閣.
- 石田英敬 (2020). 『記号論講義——日常生活批判的のためのレッスン——』筑摩書房.
- 石黒武人 (2006). 「多文化関係における日本的コミュニケーションの可能性: <察し>に内蔵された肯定的側面」『多文化関係学』3, 159-168.
- Ishii, S. (1984). Enryo-sasshi communication: A key to understanding Japanese interpersonal relations. *Cross Currents (Journal of Language Teaching and Cross-Cultural Communication)*, 11(1), 49-58.
- 石井敏 (1989). 「異文化コミュニケーション研究方法の体系化モデルの構築」『異文化コミュニケーション研究』2, 1-19.
- 石井敏 (1997). 「異文化コミュニケーション研究の歩み」石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔 (編)『異文化コミュニケーション・ハンドブック』(pp. 28-33). 有斐閣.
- 石井敏 (2001). 「研究の方法と視点」石井敏・久米昭元・遠山淳 (編著)『異文化コミュニケーションの理論——新しいパラダイムを求めて——』(pp. 19-27). 有斐閣.
- 石井敏 (2005). 「研究法のまとめと今後の課題」石井敏・久米昭元 (編)『異文化コミュニケーション研究法——テーマの着想から論文の書き方まで——』(pp. 159-172) 有斐閣.
- 石井敏 (2008). 「人間と人間、人間と自然、人間と超自然の異文化コミュニケーション」『異文化コミュニケーション論集』6, 9-17.
- 石井敏 (2013). 「日本のコミュニケーション研究・教育の促進に必要な新興課題」『Human Communication Studies』41, 109-117.
- 石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔 (編) (1997). 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣.
- 石井敏・久米昭元 (編) (2005). 『異文化コミュニケーション研究法——テーマの着想から論文の書き方まで——』有斐閣.
- 石井敏・久米昭元 (2013). 「異文化コミュニケーションの研究」石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』(pp. 235-255) 有斐閣.
- 石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人 (2013). 『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣.
- 石井敏・久米昭元 (編集代表)・浅井亜紀子・伊藤明美・久保田真弓・清ルミ・古家聡 (編) (2013). 『異文化コミュニケーション事典』春風社.
- 亀山雅人・中村陽一・平賀正子・加藤睦 (2011). 「特集 座談会 10周年を迎えた立教大学独立研究科」『立教』218, 2-19.
- Kim, Y. Y. (2001). Mapping the domain of intercultural communication: An overview. *Communication Yearbook*, 24, 139-157.
- Kluckhohn, F. R., & Strodtbeck, F. L. (1961). *Variations in value orientations*. Westport, CT: Greenwood

Press.

- 小山亘 (2011). 「異文化コミュニケーション学と環境学の現在」鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘 (編)『異文化コミュニケーション学への招待』(pp. 1-44) みすず書房.
- Kramer, E. M., & Ikeda, R. (1998). Understanding different worlds: The theory of dimensional accrual/ dissociation. *Journal of Intercultural Communication*, 2, 37-51.
- 久米昭元 (2011). 「異文化コミュニケーション研究の歩みと展望——個人的体験と回想を中心に」鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘 (編)『異文化コミュニケーション学への招待』(pp. 47-69) みすず書房.
- 萬代望・海山宏之・柴田初男・清野勝男子 (2019). 「現代日本人の宗教意識に関するアンケート調査」『茨城県立医療大学紀要』24, 129-136.
- Martin, N. J., & Nakayama, T. K. (2007). *Intercultural communication in contexts (4 rd ed.)*. New York, NY: McGraw-Hill.
- 守崎誠一 (2000). 「異文化間コミュニケーション研究——その歴史と課題——」『国際関係研究』21 (3), 161-193.
- 守崎誠一 (2001). 「社会科学としての異文化間コミュニケーション研究——「日本文化論」の影響とその問題点——」『国際関係研究』21 (4), 173-198.
- 灘光洋子 (2006). 「社会構築主義が異文化コミュニケーション研究に与える影響についての一考察」『成蹊英語英文学研究』10, 133-147.
- 中野卓 (1977). 『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代——』御茶の水書房.
- 野田研一 (2011). 「世界／自然とのコミュニケーションをめぐる」鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘 (編)『異文化コミュニケーション学への招待』(pp. 153-167) みすず書房.
- 野田研一 (2013a). 「環境コミュニケーション」石井敏・久米昭元 (編集代表)・浅井亜紀子・伊藤明美・久保田真弓・清ルミ・古家聡 (編)『異文化コミュニケーション事典』(pp. 43-44) 春風社.
- 野田研一 (2013b). 「自然観」石井敏・久米昭元 (編集代表)・浅井亜紀子・伊藤明美・久保田真弓・清ルミ・古家聡 (編)『異文化コミュニケーション事典』(pp. 407-408) 春風社.
- 鳥飼玖美子 (2011). 「あとがき」鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘 (編)『異文化コミュニケーション学への招待』(pp. 478-484) みすず書房.
- 鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘 (編) (2011). 『異文化コミュニケーション学への招待』みすず書房.